

める上でも、先生方から何かそういったことに関する資料を出してもらえないものかと、思います。2年生までは、あらゆる分野の内容の提起のチャンスが少なかった様に思います。それだとやはり、専門に入るにあたって焦りの様なものを感じます。

T：それも必要なことだと思いますね。しかし、学生の方から、もっと教官室をのぞくようにもすべきじゃないでしょうか。何事も積極性が必要だと思います。また各研究グループなどでセミナーも開かれますから、そういうセミナーに学生も積極的に参加するようにしたら良いと思いますよ。

S₃：セミナーというのがよく分かりませんが。

T：それは、どんな形でも良いと思います。まあ、平易な言葉でやるセミナーというのもやったら良いと思いますね。それに学生の方も分からん、と思わずにどんどん出席して、どんなにつまらないと思えるような質問でもするようにしたら良いんじゃないんですか。我々教官でも、そういう自分の専門外のセミナーに出席したら、なかなか全てを理解することは出来ませんからね。

S₁：僕は今1年生なんですけど、1年生はとれる専門がほとんどありません。それで、今後自分の方向を決めるにあたって、例えば2、3年生がやっていらっしゃる実験の見学なんかをさせてもらいたいと思うのですが。

T：それは各研究室へ行ってみたりしたら良いと思いますよ。実験の見学については、実験の邪魔になったりしてはいけないので、その受け持ちの先生に相談してみなければなりません。それに先程も言った様に講演会やセミナーに積極的に参加

されるべきだと思います。

S₂：1年生の時に、単位制限があるんですが、単位制限があるために1年の時に、自分が取りたいと思う授業が取れないんです。それでは今後自分のやりたい領域が変わった時に困るんじゃないかと思うのですが。

T：単位制限はあっても、聴講という形でいくだけでも講義を受けることが出来ますから、そういう方法をうまく利用されたら良いと思います。

歩み

T：いろいろな問題はあるにせよ、総科は学部として大変な進歩をしている様に思います。私が思いますに、たとえどんなに立派な学部であっても、それが進歩しない学部であるならば、その学部はだめなんじゃないでしょうか。その点この総科は、今まさに前進している学部だと思うんです。確かに総科はまだまだ完成されていませんが、この前進している、というところが、私は大変良いところだと思います。そういう学部で研究できる私は幸福だと思っています。今本当に毎日が楽しいです。

T：そうですね、これから皆で歴史を作って行かなければなりませんね。

S₃：そうするためにも、今回の様な話し合いを何度もする必要がありますね。その時にはもっと多くの先生方や学生諸君に出席してもらって、もっと自由な話し合い、建設的な話し合いが出来るようにしたいと思います。

註) 文章中のS₂は学生(数字は学年)、Tは先生、Mは大学院生をさします。

地域文化コース

5月29日 出席者 教官：上杉(イギリス)志邨(アメリカ)堤(日本)丸山(アジア)水島(比較)頼(日本)順不同、学生：1年～4年、16名。

各講座では今どんなことがやられているか。

比較では、前から比較文化研究会というのを学生と教官でつくっていて、月に1回発表会を開いている。今度、合宿の企画もあり、それから「比較文化研究」という雑誌も出そうとしている。これは主に学生の論文やら、教官の発表、卒業生の近況を含めたもので、これから年に1度くらいは刊行したいと思っている。教官の方でも比較文化論集のようなものを年に1冊位、刊行する予定に

なっている。

地域文化研究コースと言っているが、学生・教官が便宜的に集まっているのであって最終的な単位は講座であるというような事を聞いている。事実、今の状態は講座中心主義とでも言えるのだが、五群合わせると、教授、助教授あわせて30人位、学生が3学年で150名くらいで、これを単位として、地域文化コースということで、雑誌をつくりたり、研究会をしたり、あるいは合宿をしたりす

るのは難しい。だから、教官が6~7人、学生30人位の今の群が、研究会、発表会などをするにも非常に動きやすいものである。今までは比較は他の「地域」の方にはごぶさたになっていた。これが地域として拡大できるのかどうか今後の課題として残る。(水島)

アジア研究には、教授・助教授・助手あわせて6人いるが、文学、歴史、国際政治、文化人類学とそれぞれ専門が異なっている。これをひとつのアジアという枠組でつつむというところに、一つの地域研究のあり方というものが見られている。しかし、これが単なる寄せ集めでなく、一体化するというのはこれからの課題であり、総合科学部の理念でもある。

アジア研究では、研究会を現在までに4回やっている。対象は、教官、学生であるが、学生も、アジア専攻の学生だけでなく広く開放している。

また、最近、専門の異なるものが、これまでどおりに研究していったのでは、総合科学なりの学問研究はできないのではないかと、ということで、雑誌をつくることで、一体化するひとつの有力な手段にしようということで、企画を進めている。今年度中には出る予定である。(丸山)

学生と色々な学習会を持った中で、アジアの学生たちと「翻身」という、中国の土地革命の進行過程を一つの村をとりあげて描いている本を読んだ。それと、日本の村、特に瀬戸内の村を見て、そういった問題を、具体的に見ていく方法を試行的にやっている。これは、日当千円もらって、住み込みで、山口県の大島へみかんの採り入れを手つだうというもので、3年間続けていて、雑誌にまとめて出している。

それから、一期生が卒業するという事で、いわゆる試行品である、こういった研究体制の中で学んだ学生が、どんなことがやれたか、何をやったかということをも本人のためにも、これからの学部のためにも形として残すということで、卒論集を出した。必要ならば、研究室にあるから利用してほしい。

また、大学院ができたことによって、これからどんどん専門的に共同の仕事がやっていけるようになったから、勉強会を院生たちと始めた。このような場をつくることで、もっと、教授たちの知恵を活用できるようにしてゆきたい。(堤)

日本研究は、日本史3人、国文2人、地理2人

というスタッフになっている。

歴史をやってきたものから、地域研究を見た時、縦の視点の枠を取り払って、地域的な、いわゆる横の広がりにおいて日本全体を考えていくという事を考えると、あらゆる学問分野が入ってこなければならず、今のスタッフでは到底無理だという感じである。しかし、広島にある大学ということで、西日本、特に、瀬戸内、山陰というような地域の問題を考えてゆく必要を感じ、また、広島にあるという意味を考えながらやっていく姿勢も、欠かすことができないのではないかと思う。地域の問題からいうと、地方史(地域史)を研究する視点が、従来言われているが、ここでは、地方史(歴史)というより、むしろ、文化的・地域的、あるいは歴史的に、一つのあるまとまった地域という視点でやっていく方法をとっている。今は、研究条件、文献等の整備も平行してやっていかなければならないこともあり、それに伴った教官の研究組織、学生の研究条件もつくっていく必要がまだまだあると思っている。(頼)

あまりにも広い興味対象が見いだせる地域文化コースにおいて、学生サイドから考えられるものとして研究会、学習会組織があるが、どうとりまとめて、進めてゆけばよいか。

共同で何かをするという場合、その動機づけとして、自然発生的に、興味、関心を持つものが集まって始めるというのならよいが、自分の主たる関心をおさえ、迎合してまでする必要はないと思う。たとえば共同研究というものも、実は、自分の研究として責任は自分が持たねばならない。主体的に研究をやるという事は、5人が5分の1ずつやるという事ではなく、複数の人がそれぞれの百パーセントの責を寄せあってはじめてできることである。(丸山)

以前の経験を学ぶ必要がある。どういうことをやって今の現状があり、どういった問題を持っているのかを押さえていくこと、特にこれから共同で勉強していこうとする人は、教官からアドバイスを受けても、3・4年が今までにやった失敗をくり返してもしようがない。だから先輩から学ぶという事も考えに入れておかねばならない。(堤)

学生間のたてのつながりが少ないこともあって、誰かが、どこかで、種々な研究会をやっている、情報が伝わってこないという事がある。自然発生的にできた勉強会をどれだけ主体的に生かしてゆ

けるか、1・2回で潰してしまうのではなく、継続できるかどうかが一番の問題である。

始まりが「しいて」という形で関心のないものが集まっても結局はダメになるから、何らかの形でつながりがあって、おもしろいと思ってやっているうちに深まっていく、これが研究会の良さだと思います。(水島)

これまでどのような研究会をやってきて、現在どうなのか、どういった問題があるのか。先輩に聞きたい。

興味対象がてんでんばらばらであるのは、専門化というより、「食わずざらい」の結果ではないか、自分はこれだけしかやらないと言ったように。だから研究会が長つづきしなかったり、うまく運ばないということになると思う。去年、自分のまわりに、6・7つの研究会ができて、全てうまくいかなかったという原因もそこにあると思う。だから、興味対象を、個人レベルでもっと広く求めてみることも考えなければならぬだろう(4年)

1年の後期ごろ、何かをやらなければならないといったような気持ちから、都市問題、科学技術問題などを考える会がおこり、2年の後期まで続いた。結局は、コースに分かれた後と、いろいろな角度から見えていけるという利点を生かしきれず、なんとなく食い違いが生じて消えてしまった。今は、比較文化の中で、授業に関係があるという必要性から集まった仲間、ラテン語勉強会をやっている。「研究会をつくらねば」というところで、ある程度の興味対象の一致点で、ぐっと集約しても、長続きさせるのは難しいという事はいえる。(3年)

十人十色の興味対象をまとめ、さらに理論的に深めようとするのは、まず難しい。だから、たとえばやらないより、やっておいた方が後に自分の役に立つようなもの——日本なら古文書、比較ならラテン語——をやる、技術的な勉強会なら、いくぶんまとまりやすいのではないだろうか(3年)

これまでの反省にたって考えてみると、自分らのやってきたことを、形として残しておくということ、雑誌にまとめるのも一つの方法だし、研究会をつくって、継続させることによって残すことも考えられる。もうひとつ言えることは、学生どおしでもっと話し合うこと、その過程で先生もまきこんでゆくということが意識的にやられてなかったということである。こういった会も、そうい

う意味で、もっと充実させていくべきものだと思う。(4年)

講座の壁をとり払って、地域文化として特色を持たせるにはどんな事をすればよいか。

コンパのルール、お金の集め方など、今、学生が知っているか? 本来、先輩が教え伝えて、ひとつのルールになるものである。地域研究では大きすぎるかもしれないが、講座ごとぐらいには、研究会とは別に、学生の組織のようなものをつくって、学年委員のようなものなり出して、いわゆる、年中行事らしきものが伝わっていく。そういった、ひとつの学部にも最も基本的なものが今はない。懇親会したりソフトボールしたり、いわゆる親睦的なものも今の総科に必要だと感じている。それがまとまって年に一度、何か行事をやるようなことをしてもよい。むしろ、学生は、てんでんばらばらという感じがする。そういうものがあって、集団生活を営む上でのルールが伝わっていくのだと思う。(頼)

公式的な言い方をすれば、総合科学部のシステムの利点を活用できていないことを指摘しなければならない。たとえば、卒論は複数の教官の指導が受けれるのに、他群、他コースに渡ってもよいのに、それを利用しきれていないという状態である。講座の壁をとり払うことが必要かどうかは別として、講座の壁が厚いのなら、それはひとりひとりがとり払わなければならないもので、本質的には、主体性ということになるのかもしれない。教室に眠っている本を利用するということで、教室を歩きまわる。まず、こんなところから始めて、講座の中で動いてみることだと思う。(丸山)

逆説的に言えば、講座の壁をとり払うのが目的ではなく、自分の壁をつくっていくのが大事な作業だと言えるのではないだろうか。その壁は、自分が動きまわって考えこんで作るものである。壁は、できてはじめてとり払えるものである。だから、いかにして壁をつくるか。こもってつくるのもひとつの方法であるし、研究会など通じて、他の人と意見を交すなかでつくっていくこともできる。(水島)

地域文化全体としてまとまりたいというのは、わかるような気はするが、形式的な見方のような気がする。まず、各々の講座でしっかりと立つことが大事であろう。壁をつくることは、まずインフォーマルな形で始める。何かを一緒にやるとこ

ろから出来上がってゆくと思う。(志邨)

総科の学生の悩みもよくわかる。反面、総科という新しい性格というところでこだわりすぎているのではないかと疑問も投げかけたい。総合的に何かをやる、このためには、早くから自分なりの視点を持ち、その視点を情熱的に追ってゆく、そこから、総合的なものの把握も生まれてくるのではないかと思う。壁をとり除くことも、これが精

神的なものであるなら、近いうち必ずとり払われるだろう。教官の相互のつながりも、他コースに比べて地域は密である。教官どおし、がっちり組んでいることが学生に伝わらないはずはないと思っている。それからこの集まりは、学生どうしも、教官と学生のコミュニケーションの場としても意義があると思うから、これからも、こういう機会をどんどんもってほしいと思う。(上杉)

ま と め

いかがでしたか。こういった形式で、コースの紹介をするのは、今回が初めてであり、司会者の不手際やコースによっては出席者に片寄りがあった感は免れませんが、このような会は学生と教官が一体となって総合科学部を作るためには、今後も必要なものであると思います。

編集委では、今回のコース紹介に若干の考察を加え、次の機会のステップにしたいと思います。

まず情報行動では、「学際研究は可能であろうが、学際教育は不可能であろう」という意見が出ました。これは、他コースにも言えることで、今後の総合科学部にとって非常に重大な課題ではないでしょうか。

現在、学生研究室は、午後5時になると閉められて使用できないことから地域研究の学生の間には、学生研究室の自主運営要求の動きがありますが、これについて社会文化の座談会で具体的な意見があり学生の自主的な参加によって、ひとつの問題解決の手段になりうるのではないかと考えられます。

環境の場合、こちらの不備もあり、出席者が群によって限られ、意見も少々舌足らずになったようです。つまり、環境科学というとすぐ公害問題が、

学問対象のすべてだというように考えられがちですが、実際にはコースの一部門に公害問題があり、その他いろいろな分野に取り組んでいられる先生、学生方がおられることを付け加えておく必要があるでしょう。

最後に、全体的なことですが、こちらの議事進行の拙さも手伝って、学生のコースに対する質問や今コースで何をやっているかとかこうやればよいといった建設的意見を引き出すことができず、コースによっては建前論に終始したようです。教官は学生の主体性を切望し、学生は教官からの救いの手を待ちこがれているといったような意見も少なくなかったことも事実で、これでは、学生と教官の間は近づきはしないでしょう。なかには、積極的に教官と学生の間を動きまわり、何とかしようとしておられる教官、学生の学習会、セミナーもあるようです。今後学生と教官がタイアップした協力関係を作り出すためにも、こうした話し合いの場とかセミナーとか学習会にもっと具体性をもたせる工夫が必要ではないでしょうか。

